

善のリストを検討する（その六）

伊集院 利 明

3-5 目的と手段

3-5、3-6、3-7で行うことは、達成がいかなる価値を持ち得るかについての見通しの提起である。そして、単なる見通しの提起にとどめず、そのような見方に一定程度の説得力があることを示していく。3-5では達成のある種の創造、開拓能力を考えていく。

目的と手段の関係は単純なものではないことが知られている。例えば、技術論、技術の哲学という分野で、技術は目的を達成するための手段としての道具のようなものだとする道具説に対して、次のような批判がなされる。（この分野に関しての私の知識は概説書的なもの、しかもそれほど新しくない文献⁽¹⁾によっている。）技術を単なる、与えられた目的を達成するための道具とみなしてはならない。技術は新しい生活スタイルや目的などを思いもかけない仕方で生んでしまうことがある。例えば携帯電話は公衆電話の代わりというような目的のために導入されたはずなのに、当時ではだれも予測も期待もしていないし望んでもいなかった、今の若者たちの生活スタイルのようなものを生んでしまった。原子力発電は発電のためのものなのに管理の都合上、中央集権化へのバイアスを生んでしまう。また技術は需要をも生み出し、コダックカメラの場合のように、技術は、技術や諸設備などを含む全体的システムとともに、そして需要とともに、同時に一気に発明されることがある。 - - 私の理解が正しいとすると概説的説明はだいたいこのように与えられているのだが、そうだとするとこの説明はやや不思議な部分があるように思える。古典的な道具にもこうした性格はある程度はあるように思われ、その意味では道具自体が「単なる与えられた目的を達成するための道具のようなものではない」という言い方が出来そうに思われるからである。もちろん、古典的な道具と近現代技術ではその点の効力に雲泥の差があることは確かであろう。

- - いずれにしても、手段と目的の関係には、手段が新たな目的などを生むことがあるというようなある種の複雑さがあるということによいと思う。ところが、そうしたことが教科書的理解であるにもかかわらず、well-beingにおける達成が問題になるとき、それへの目配りが抜け落ちてしまっているように思ってしまう。

このことはペプシ問題およびそれに類縁の様々な事柄を考える上でかなり重要な意味を持つように思える。やって何になるかわからないことをすることと、最初から何の意味もないとわかっていることをすることは、かなり大きく異なる。単なるパイの奪い合い以上の意味がないと思っていることをやることはかなり気のめいることである。しかし、意味のなさそのような結果をもくろむような事業も様々な価値を新たに生み出していく可能性を持つ。目的が一義的に決められているような場合も、そのための過程としか見えないものが、新たな目的や価値につながっていくからである。

このことはたいしたことではないと思われるかもしれない。しかしこのことは、これまでの議論を補強する意味もあるし、それ以上に達成の価値についての新しい視界をもたらすかもしれないかなりの重要性があると思える。そのうちの細かい方の話を先ずしておくと、ペプシ問題についての3-1で見たような経営者が評価されていることを論拠に「達成」自体に重要な意味があるとするような議論に対しては、かなり懐疑的になってしかるべきであろうということがあげられる。ペプシの経営者のような包括性の高い仕事の場合、その中に新たな目的や価値が生まれてくる可能性も当然高くなる。我々はこうした言わば隠れた目的の方の価値や、達成のもつ発見、創造作用の方を高く見積もっているのだという可能性はかなりあるように思える。

達成には新しい価値、目的の開拓、創造の価値がある。達成がそれ自体として重要という以上に様々な要因と結びつくことにおいて大きな価値となっていくということの一局面を、ここで示していこうとしているのだが、ここから、この局面が決して小さなものではないことを示していかなければならない。まずこうした創造、開拓能力の射程がきわめて広いことを示し、その上で、達成のこの価値が達成の単なる道具的価値にすぎないものと言えるようなものではなく、達成のある種の内在的な価値と結びついた、達成の本質そのものにかかわる価値であり、生の価値の重要な側面となっていくのだということを示していきたい。

達成が新たな目的、価値の発掘創造につながる展開力を、あまり限定的に考えるべきではない。まず、事業営為は、事業的な新たな目的の発見につながるというだけではない。ある一義的に与えられた目的のための事業であっても、それは参加者のそれぞれにとってはその枠を超えた多様な意味を持つ。つまりある人にとっては家族を支えることが主眼であったり、あるひとにとっては楽しみであったり、ある人にとっては自己実現であったり、ある人にとっては他人に対する優越感であったりする。また、事業は様々な社会的文脈、状況において、事業的意味以外の多様な社会的意味を持ち得る。達成の局面開拓、目的開発力はこうした広い範囲に及び得るし、さらに重要なこととしてそれらの領域をまたいだ相互的影響などを引き起こし、さらには領域同士の間の統合体をも形成していく可能性を持つ、いやそうした可

能性は高いと見るべきであろう。だから達成の開発力の射程はかなり広いものと考えてしかるべきであろう。

もう一つはこうした開発力が単にキーネーシスの局面だけでなくエネルギー的の局面にも及ぶと考えられるということである。現象面から言えば、自分がエネルギー的、プラークシ的な意味で何をやっているのかということが、やっているうちに、つまり何かをすること自体においてはじめて見えてくることを我々はしばしば経験しているであろう。大戦中、ユダヤ人を助けた多くの人がもともとさして強い動機があったというわけでもなく⁽²⁾、とりあえずやってきたユダヤ人をかくまわねばと思ったということが次第に大きな活動となっていったように、個別的、キーネーシスの場面で目的手段連関においてまず与えられている状況から（言わば下からの視向線で）何ができるかを見て「自分としては自然な反応」をしていくことが、エネルギー的な像で大きな像を作り出していきることがありうるわけである。こうしたエネルギー的な像というものはまた inclusive end 的性格のものでありながら様々な部分によって一つの有機的統合性として⁽³⁾の像を形成してくる。そしてこの部分というのが実際には生の様々な局面領域にわたるわけだから、問題になっている開発力もますます射程の広いものであることになる。

こうしてエネルギー的にもキーネーシス的にも、我々は現実には何かを生きる場で手探りのうちに自分で何ができ自分の人生がどのようなものであるかの像を切り開いて描いていく⁽⁴⁾。しかもキーネーシスの場面で生みだされる目的物が、impartial な誰にでもにとっての価値、有益性を持つ以上、これは単に自分の人生を切り開くだけでなく、生とはそもそもどのようなものたり得るのかの切り開きでもある。

以上の射程の広さについての考察を土台として、達成の well-being 価値にとっての重要性の一つの局面を示していきたい。こうした射程が単に広いだけなのではなく、重要な重み、深みを持つことを説明し、達成のうちに内在する、あるいはほぼ内在すると言える一つの価値が、well-being を構成する intrinsic な価値と直結していることを論じていく。いま述べた重み、深みについては、それを論じることは重要ではあるものの、議論というよりは説明のようなものですむ。その前にまず達成に（ほぼ）内在する一つの価値とは何のことなのかを明示しておかねばならないが、実はそれはすでに述べてしまっている。自分の生を、そしてそもそも生のなんたるかを、手探りの中で切り開いていくことである。このことの意味の説明は上の論が既に与えている。これが well-being にとっての intrinsic な価値であることと、達成の単なる道具的なはたらきによる価値のようなものではないことを、論じておこう。

まず、生を手探りで切り開いていくことが道具的にでなくそれ自体として自身の生にとって重要であるということは、我々の、あるいは少なくとも今日の先進国の多くの住人の常識

に近いものであろうと私は理解する。Well-beingのintrinsicな価値であるということはprima facieにかなりの説得力を持っていると言える。そしてこれの哲学界での扱いだが、ひとつの例として、ヒトクローンについての賛否の争いがある。ヒトクローンとして生まれた子は人が自分の力で手探りで自分の人生を切り開いていくことの価値を奪われるのではないかという問題をめぐっては、賛成派、反対派ともにこれがintrinsicな価値であることを認めたくて実際にそれが奪われることになるかを廻っての論争がなされる⁽⁵⁾。intrinsicな価値があるということが学界の基本的了解と考えられるであろう。

もうひとつ、達成によって開拓がなされるわけだから、開拓は達成がもつ道具的はたらしきの価値なのではないかという問題についてだが、これについては、開拓と、広い形でとらえられた達成とは、決して切り離されるものではなく、概念的に区別できても、後者は実体的かつ実態的に前者を含んでいるのではないかと提起したい。と言うのも、ここでいう達成というのはただ単に何かを行うことではなく、自分のこととして、自分の人生のこととして行うことである。である以上、様々な意味連関をきわめて漠然とした暗黙の形においてであっても見据えることなしには達成というものも考えられない。そしてそもそも我々が何かをしていくことのうちで自分が何をしているかを見出していくということは、3-2の論でも考察されていたことである。とすれば、こうした見とり、開拓と、達成は、もともと切り離せるものではないことになろう。開拓の働きは達成が達成として成立するためにもともとその機構の中に組み込まれていると言えるであろう。

手探りで自分の生を切り開いていくことが生にとってのintrinsicな価値でありしかも達成にとって本質的な働きであることを示してきたわけだが、しかし、手探りで生を切り開くことの価値はそれ自体としてそれほど大きいものと思われなくてもいいかもしれない。しかし、先に示した開拓の射程の広さというものは、深み、重みをも伴っており、それが、手探りで探ることの価値に連動直結していると思われる。その、深みこそが重要なことであると思われるのだが、その深みがどのようなものであるかということは、実は、いま上で述べたことの中に、すでにほぼ含まれている。見出されていく価値が自分の人生のこと、私のこととなっていくということ、あるいはそのようなものとしてはじめて成立するという、そのことである。

このことについては射程の広さを論じたところで、それがエネルギー面に及ぶとしたこととの関連が特に重要性を持つ。達成の開拓力において、私はエネルギー的に自分が何をしている者なのかを了解していき、自分の生の像を自分のものとして描く。これは特に明確な概念的な理解であると考えられる必要はない。例えば2-8でHelmの論点を参照したが、情動等を含む一定の反応パターン、構えが形成されるということも、私の生が像をむすんでいく

ことの一つのあり方である。こういった像の開拓形成は先に論じたように一方で、ある意味では生というものがそもそもどのようなものたり得るのかの切り開きである。しかし同時にそれは、切り開かれる像が私の生の像である限りにおいて、私の生の問題であり、私の生の価値の開拓である。そしてエネルギー的側面とキーネーシス的側面の相即において、キーネーシス的活動の成果になるものとして見出されるような価値目的も、私の生のこととして組み入れられていくことになるのだ。そしてこのことが、いましがた述べた開拓が達成にとっての外的結果のようなものでは決してないということと密接に連動していることは明らかであろう。達成は単に行うことでなく、自分の生のこと、自分のこととして行うことである以上、様々な展開の可能性を見る目がそこには内在せねばならない。達成自体が、この意味で自分の人生のあり方を問題にするものであり、自分の生で達成される価値を自分の生のこととしていく作用である。こうした、達成の本質に属する働きにおいて、私の生の像が私のものとして形成されていき、キーネーシス的運動の成果によるものとして見出される価値が、私の生のこととしてその中に組み入れられていく。

このことは単純なことのようだが、達成と生の価値との関係においてかなり重要なことのように思える。単純というのは、構造が単純ということではなく、自分の生の善は自分で切り開いていくものであるということや、何かを（エネルギー的に）なしている自分の生は自分の固有の生として、その点において自分にとって善いものなのだということは、多くの人がごく当たり前に理解、実感しているところのことであろうからだ。しかし、価値がこの私のもの、こととしてあるということ、この言わば結びつきは、生にとって決定的に重要なことであろう。いま示したことがそうした紐帯の少なくとも一端、おそらくはかなり重要な一端であることは明らかに思える。もちろん構造的に解明されなければならないことは多い。一番大きな問題となるのは、キーネーシス的活動で達成されるものの価値は well-being 的価値ではない（少なくとも異なり得る）のだから、それへのかかわりが私の well-being 価値にとって何らかのかたちで構成的になっていくとしたら、どのようなかたちの変様をどのように受けることで組み入れられていくかが解明されるべき課題になることであろう。それでも何らかの組み入れがあること自体を、ひらたく言えば、例えば、すばらしい事業を成し遂げる（ことにかかわる）こと、またそれ以上に、日々自分が何らかの意味で大切にすることに取り組むことそのことが、私の well-being を何らかの形で構成すること自体を、否定することはばかげているであろう。ここには 3-1 で扱ったような「達成」自体の価値とはまったく別種で、達成が生のような局面と関わることにあって生まれる、桁違いの well-being 価値が存在することは疑いの余地のないことであるように思われる。

目的と手段の関係の複雑さはきわめて広い射程を持ち、深みの次元にも関わってくる。先にも書いた通り、何も意味がないとはじめから分かっていることをやることは、かなり気のめいることであろう。現実には何の新しい意味も生み出すはずがないと強く思いながらやるようなことはあまりないだろう。というのも、何の意味も生み出すはずがないと思えるような場合はある程度の社会レベルではそれほどは（客観的に言う限りでは）ないであろうからだ。「生きていれば何とかなる」のである。あるいはペプシコーラの経営者（フィクションであり実在の人物とは一切関係がない）のような人は、競争によって神の手が働き社会が潤うことになるのだと比較的単純に信じて、経済発展に尽くして世の中を良くしようとしているのかもしれない。そして本セクションの主旨からしても、ある種の気まぐれな神の手のようなものがたしかにあると言ってしまってよいのかもしれない。それでも重要なことは、明確に自覚的な形でなくとも、日々自分の活動自体によって自分の生を上げていくことそのことである。

以上のことを、3-6で場面をさらにもう少し拡張させて考え、3-7で達成と私の生の価値の開拓との関わりのさらにもう一つの重要な局面の考察へとつなげていく。

3-6 賽ノ河原の芸術家

子供が賽の河原で石積みをしている。塔のようなものを作らされているのだが、積み上げるたびに鬼がやってきて壊してしまう。シジフォスの状況だ。だが、ある子どもはふと思う。せつかくやるのならば、石の積み上げ方を工夫して、面白い形を作ってみよう。最初はゲーム感覚でやっていたのだが、この子供は飛びぬけて芸術センスと能力が高い子供であったので、作られるものもだんだんと芸術みを帯びてくる。そして鬼が壊す直前に最も素晴らしい形になるよう、子供の制作もだんだんと真剣みを帯びてくる。鬼は子供の意図を察知して、子供が一番嫌がるであろうタイミングを見計らって壊しにかかるが、子供もそれを察知してそれを織り込み済みで計算に入れて作るようになる。鬼はさらに作戦を変更して、わざと何も考えずに全くでたらめのタイミングで（神がサイコロを振るかどうかはわからないにせよ、鬼は振る）壊しにかかる。子供はこの偶然性攻撃に対応しようとするが、さすがに疲れ果ててふと思う。こんなことをしていても何にもならない。ほくの作品は残らないではないか。しかしこの子供はおそらく芸術的才能があるだけでなく、生前に自らの強い関心で様々な芸術作品を自主的に見て歩いていたので（いっしょに絵を見たほくの愛犬はいまどこにいるのだろうか）次のように考える。花火は一瞬のアートだ。パフォーマンスアートだって残らない。昔の音楽演奏もすべて消えてなくなっていたではないか。でもそうしたものは多くの人が見たり聞いたりしているが、ほくの作品はだれも見えていない。でも、それでも誰

も見ていないからと言ってその作品の価値が下がったりするのか。セザンヌやゴッホやルソーの作品をだれも見えていなかったとしてそれがなんだと言うのか、作品の価値にはかわりはない。めちゃくちゃなタイミングで壊されても偶然性のアートというのはいくらもある。

- - かくして、子供はまた制作に向かい始める。そしてこの、神様あんまりですというような状況 (I dub thee unforgiven) の中で何時しか作品は本格的にアート性、芸術性を獲得しはじめ、彼の作品はこうした彼のおかれた場における人生 (死後の生も含めることにしておく) 自体のある種の体現になっていき、そして彼の活動の姿そのものが一種のアートとなっていく。

この話の著作権は私にあるとは言えない。昔のゼミでシジフォスの話を取り上げた時にゼミ生がその場で考え出したアイデアがよくできていると思ったので、ここで大幅に拡張したものである。

自分の人生がこのようなものだと感じている人がどれほどいるかはともかくとして、この話の中の様々な面が我々の生の諸局面に親近性を持っていることについて特に説明を要するとは思えないが、この話は達成に関してどのようなことを示唆しているであろうか。様々なことが浮かび上がって来るように思われる。

- ・ 達成は明確な形を取った「達成」とは限らず様々な段階のものがあり得る。そしてそれが自身の生のあり方に様々に結び付けられていく。
- ・ きわめて様々な段階や要素が生全体に関わる、あるいはそれを体現する形として見出される可能性を持っている。
- ・ 見出すこと自体が、あるいは見出す作用自体が、達成の機能のある種の一角をなす。もっと言えば、そうした見出し、あるいは、生の側面や姿との関連づけと、達成の製作的側面とは連動し、一体化し、生の中で様々な位置を占めるような達成のあり方を形作っていく。
- ・ 人生のあり方と芸術的価値との関係。これは、人生のあり方が芸術的であるという以上に、逆に芸術のあり方が人生のあり方から考えられるべきものであるのかもしれない。また、美的芸術的要因が well-being の一環として客観リストに挙げられることがあるが、それが正しいとしても、リストに加えるものを、美的観照として限定してしまっただけでは、あまりにも西洋近代芸術観に影響されすぎていると言えるであろう。(アートを見たり聞いたりすることは、必ずしも参加抜き単なる観照とは限らないであろう (e.g. Shusterman 1992)) そしてこの「美的」な価値というものも達成の価値から分けて考えることが容易でない局面があるように思われる。3-5で考察したように、我々の生のエネルギー的形、像を考えることは必ずしも言語的に明確化できないことが多い、あるいはそれが普通であ

る。生の像の描き、形成化というものは、どうしても芸術的なものとある程度の親近性を持たざるを得ないように思える。

- ・ある種のパフォーマンスアートの性格に着目しなければならない。人生とはある意味何かをしている姿である。そして何か形が探られて作られていくと言っても、探っている姿、探りながら生きていることが生であり、達成が達成であること、生がキーネーシスのエネルギーであることの中で、手探り、模索、開拓がおこなわれるまさにその営為自体が、生の形の一部であり、作品を構成する。それを考えると、上に述べた非言語性、また、先にエネルギーに関してエネルギーと言っただけでは何をしているのか規定できないことが問題である、この、できないということに、むしろ積極的意味があると考えられることができるのかもしれない。芸術というのは、何をやっているのかを理論的言語的に規定出来たら、余計なものになりかねない。まさにこうしたことにこそパフォーマンスアートの意義があると考えられるかもしれない。

ここでの考察は、3-5での考察で得られたことを局面を広げ、またそのある面に特に光を当ててみたにすぎない。達成がエネルギー的像の形成作用でもある以上、価値ある姿を作り出していく作用であり、また自身もがその姿の構成要因となる形でそれを作り出していく姿であることになるのは、当然のこととも言える。だが、こうだとすると、達成はそれ自体に価値があると言ってすませしておくことはできなくなる。むしろ達成は価値あるあり方を形成していく営為あるいは自分の生を価値あるものとしていく営為として、より重要であるということになりそうである。どちらにしても、こうした方向を考えない達成観が不十分であるということがたしかであると主張することはできるように思える。

パフォーマンスアート自体はそれ自体で価値を持つと言えよう。しかしここで追及されているような生のパフォーマンスアート性において我々は台本なしに手探りである。また、アートの分野における台本なしのパフォーマンスにおいてアーティストの身体がそれとして、少なくともある程度は成熟した状態になっている（だからアーティストとしての資格で活動できるのであろう）のと違って、我々の生にとってはその資格自体が遂行そのものの中で探られていかねば、あるいは獲得されていかねばならない。

こうして達成は、それ自体が価値であるという面と、それ以上に価値への道であるという面とを併せ持つ。前者も後者との連動、関係においてはじめて意味を持つものとして考えられねばならないであろう。だとすれば、達成を快やその他の価値と同じような形で well-being を構成するものとして横並びにとらえるようなとらえ方は危険である。価値の全体的構造そのものが考察されねばならないのだ。

3-7 ペプシ問題と partiality

Hurka はペプシコーラとコカコーラのどちらが売れるかということに大きな意味などあるかと問いかける。

では、次はどうだろう。二人の子供のどちらかは救われどちらかは助からないという状況で、あなたの子が救われるかそれとも (同じような) もう一人の赤の他人の子が救われるかということに、大きな意味があるだろうか。

もちろん、あなたにとっては、おおありもよいところである。しかし全人類的な観点、公平無私の観点に立った上での問題となると話がだいぶ違う。(子供の例の場合は両方ともだめになった場合の悪が大きいという点がコーラの場合と違うと言われるかもしれないが、あくまでもどちらがということがここでは問題である。)

きわめて単純なこうした問題関心が、well-being における達成の位置づけについての文献のかなり多くにおいて抜け落ちてしまっているように思える。

partiality 的価値が哲学で頻繁に取り上げられるようになったのは、功利主義と義務論に対する、とりわけ功利主義に対する、B.Williams や M.Stocker らの批判が一つの重要な契機となっており、また Nagel のどこでもないところからの視点と私からの視点との区別もこれへの関心を活性化させたと言えるが、こうした経緯についてはそれ以上の論究は控える。

こうした partiality 的価値は親子関係のような場合だけではなく、友人関係、恋人関係にもある。似たようなものと思われるかもしれないが、この間の違い、区別はペプシ問題を考える上では押さえておく必要がある。友人関係などの場合は基本的には関係が構築されることで友人どうしとなるわけだが、親子の場合は愛情関係などが成立する前からともと親子関係がある。 - - ただしこの違いはあまり強調されすぎてはならない。友人関係が成立するものもその前に何らかの偶然的なかわりなどがあったから (Kolodny 2003 (esp. 169)) だし、また、親子関係というのも、人間の文化的違い (社会構築主義的観点) 等を考えると、愛情関係のための絶対的基盤となると考えるには問題が残る (de Sousa 2015 (72-73))。

ペプシ問題の場合に、事業団体などと自分の間の関係が偶然的な要因をはらみつつ起こりながら、自分にとって重要なものになっていくということがあることは明らかに思える。ちなみにこの場合、上の区別のどちらの要因もあるであろう。自分の属する会社は多くの場合ある程度自分が選んだものでありながら、他に選択肢がなかったという要因もあるだろう。それでも自分と会社の一定の関係、事業との一定の関係が起これる事業が自分の project として引き受けられそれと自分との関係の history が形成されることにおいて、関係が、また事業自体が、自分にとっての一定の重みを持つてくる。自分の会社を大切にするのは、大

部分が自分にとっての利害関係上のものではあっても、それだけでは説明がつかない要因があることは明らかに思える。少なくとも多少は「自分の会社だから」なのだ。友人が危険に陥って、身の危険を冒してでも助けに行こうとするとき、脳裏をよぎるの（それによって動機を強化するの）も、その友人との関係の history であろう（Kolodny 2003 (esp.162)）が、ある程度似たことは事業団体との関係においても言えるであろうし、自分の大切にしている事業ならばなおさらであろう（例として自分がやってきた小さな店をたたむかどうか迷うというような状況がわかりやすいかもしれない）。関係、history というもの、そして事業が自分の project として引き受けられることが、それらの自分にとっての重みを作ってくるように思われる。

（もっとも、こういったことは終身雇用制に近い社会の場合と、頻繁にヘッドハンティングが行われるような場合とでそれなりに大きな違いがあるのかもしれない。そして、この問題は実はかなり大きな問題なのかもしれない。（例えば、Nozick 1974 (430) が例に挙げた、結婚について男女ともそれぞれ魅力の順位のようなものがあって、それぞれの一番ずつから組み合わせあっていくというような状態になったら、我々の価値観はかなり変わるかもしれない。）この問題への深入りは避け、本稿にとってとりあえず必要な事だけおさえておこなう、次のようになろう - - 一方でこうした差が大きな違いをもたらすだろうが、他方で、様々な偶然性が左右したその場ごと、その時々によ、関係、一定の history が形成されていくという根本的構造は簡単には揺るがないだろう。）

ペプシ問題のような場合においても偶然的な事柄に基づいて関係が形成され project が自分のものとして引き受けられ history が形成されることで、事業や物事がそれ自体として重要になるということがあり得る。ひとが何かとある一定の関係になることにおいて、そのものが自分にとって重要になっていくということがあり、そしてまさにそのこと自体が自分の生の価値にとって大きな重みを持つてくることがある。達成というものが人間においてこうしたこととの連関において遂行されることがかなり多いことは間違いがない。達成は人間の自己理解とともにあり、ある事業の自分との関係の history が形成されることと、自分の project として引き受けられていくことが、相即して成立する。そしてそういった事業が自分の事業として引き受けられていく上では、引き受けという言葉自体が示しているように、何らかの偶然的所与性がそこにはある。達成においては、何らかのある程度偶然的なものが自分によって引き受けられ、その遂行において自分の生の価値が形作られていく。達成がこうした形での偶然的所与性による個別の関係性を基盤とした価値、つまり partiality 的価値の形成の基盤となることが明らかとなってきた。

この、事業や人間関係における partiality 価値をそれとして支える構造的基盤、眼目のな

んたるかについての学界の議論状況に参加するためには、とりあえず、partiality 問題についてのいま（執筆時点 2015 年）のところの最もまとまったモノグラフと言える Keller 2013 の概要を押さえておくのが便利である。簡単に整理すると、Keller 2013 は partiality 価値を形成する基本となる要因の候補として、project 性、関係、そのもの自体の価値の、三つをあげたうえで、このうちのはじめの二つを退け第三を自説として主張している。私自身は、三つとも正しく、三者がそれぞれ異なる角度から構成しているということ自説としていくことを、現段階では見通しとしているが、それはここではどうでもよい。本稿の主旨にとって重要なことは、候補に挙げられているどれが正しいかはともかくとして、それなりに候補が絞り込めているのであり、partiality 的価値というものは「あるらしいが、その構造の解明の糸口が全くつかめないようなひどく得体のしれないもの」（つまり、本当のところは、あるかどうかすらあやしいもの）などでは決してないこと、そしてもうひとつ、その候補が、達成の構造にとってかなり根本的な要因となっているということである。というのも、達成が私の生のこととしてある以上は、何かとのそれなりの関係の history の形成への動向は必要不可欠になるし、また project 性が達成の根幹であることは言うまでもない。もう一つの項目について言うと、達成が当該の事物の固有のよさへの着目と深く結びつくことは明らかである。ものごとをその人なりにきわめた人は、そのもののよさがよくわかる。そしてそもそも物事のよさの中には、ある程度の深く長い関係をもった者にしか決して見えてこないものがある（Jollimore 2011）。こうしたことに加え、さらに、達成において partiality 的価値が生成するということの主張がそれ自体として直観に訴えるものがあり prima facie の説得力があることを考え合わせれば、本稿にとって達成と partiality 的価値との関係の主張のためには十分な基盤が用意されたことになる。

達成において偶然的所与が引き受けられ私の project として私と一定の固有の関係の個別の history を作っていくこと、こうした個別性に彩られた重要性があることが、私の価値となっていく。達成がこのように私の生の形を作っていく。達成は他と横並びの well-being 構成要素となるというよりも、このような形で私の生のそして生の価値の生成に関わりそれを構成していくということが浮かび上がってきている。ここに偶然性の関与があるということがまた、達成されるもの自体に（公平な観点からすれば）たいした価値がないにもかかわらずその達成が重要になるのであり、達成する（せまい意味での）ということがそれ自体で価値を持つという外観を形成していくことになる。

こうした達成と partiality とのかかわりについてさらに二点を取り上げておきたい。

一つには、partiality 的なものもある点で公共的に impartial に扱われ得るということである。あるものにとってのあることの価値はその人にしか見えないことがある。ある人にとっ

てのその子の重要さはその人にとってだけのものであるし、また、恋人のよさにはその相手にしか見えないものがある。しかしある人にとってこうした partiality 価値が固有のものとしてあることがその人にとって善いことであり well-being のきわめて重要な一環となるということ、また、ある人にとってのその人の事業達成の価値がその人にしか見えない面があるにせよ、まさにそのこと自体が、彼の well-being にとって重要であること、こうしたことは公共的にうけとられ理解されることであるし、また現に我々はそれを当たり前のように理解している。こうした理解がどのような構造に基づいて成り立つのかはもちろん問題であろう（そして私は解明される必要があると考える⁽⁶⁾）。それでもここではそうした理解が事実として成立しているということに定位して話をするができる。

もう一つは価値のある種の bestowal である。Frankfurt 2004 は、愛は相手の価値への反応ではない、大切だから愛するのではなく愛するから相手が必要になるのであり、愛は相手に価値を与えるのだとする。この話を事業に適用すれば、私が事業を自分のこととして引き受けコミットするがゆえに事業、達成は価値を持つということになろう。愛についての Frankfurt の説はかなり批判されている。相手がだれでもいいわけがない、愛に理由がないとは考えにくい。キリスト教の神のアガペーすら決して完全に無差別ではなく人間という限られたものを特別扱いする、一方的な価値の付与など不可能である、等々 (e.g. Badhwar 2003, Kolodny 2003⁽⁷⁾, Helm 2010)。これらの批判は至極もつもののだが、それでも私と特定の人との、そして私と事業等とのかわりにおいてある種の価値付与、価値創造があることを認めないこと、重視しないこともまた不合理なことであるように思われる⁽⁸⁾。達成の価値、開拓性、創造性についての考察は、関係性や project 性における価値生成を明らかにしたものだが、そのような考察を特にせずとも、人や事業等に愛着や個別的な深い関係などがなかった場合に、我々が価値というものをどのように感じ、捉えることになるだろうか少し想像して見るだけで、我々にとっての価値がずいぶんと違うものになってしまうことは明らかであろう。

この価値付与の指摘からはなしをもとにもどし、達成の意味を整理し、またそれによってこの bestowal の論点をもっと肉付けすることで、このセクションをまとめよう。私が事業を引き受ける時、それは私にとっての固有の価値となる。まさにそのような形で私に重要となるということが、私の well-being のための重要な構成要因になる。人間との関係においても同様である。人間やものにもともとそれなりに価値があるからこそ、もしくはそれに取り組むことになる際の様々な要因が取り組むべきことについての何らかの理由を与えるからこそ取り組むにせよ、それだけでは私にとってのその価値は説明がつかない。また、ものごとには、長く付き合うことではじめて見えてくようなよさがある (Jollimore 2011) にせよ、

それだけでも説明にはならない。私が世界において現実面に面してある一定のことに自分を(局面的にはあれ、また限られた時間においてであれ) 限定してコミットしていくこと、こうした意味における達成において価値が生まれるのであり、達成が価値ある目的を達成するのとは全く違った意味で価値創造的であることを否定することはできない。この点からみて、達成は単に価値の一つであるというよりは、むしろ価値の生成の機構の中心の一翼である。

bestowal と言っても、もともと持っている価値を与えるというのではない。関係があっではじめて重要性が生まれるという主張に対して、それは人間の基本的な価値としてもともと潜在的にあったものであり、関係成立を機縁として、それが発現しただけなのだと言張されるかもしれないが、しかし、関係、コミットがなければそのような価値は問題にならなかったものであり、潜在的に存在する価値などというものはあったかすらわからないようなものなのだ。反論の言い方は、実質的な意味はそれほどはないと言っていいように思われる。どちらにしても何らかの価値創造性、生成性があることは認めざるを得ないであろう。

3-8 Scanlon における達成と well-being

本稿の主旨は、Scanlon 1998 の well-being 論とある種の共通性を持っている。それは、well-being の中にしめる達成の役割を中核的なものとみなし重視すること、そしてまさにそのことによって well-being と、価値自体の問題性、境界のあいまいさを主張することである。相違点は、達成の果たす役割と、その重要性の意味の捉え方、そして本稿が Scanlon 以上に well-being の構造の混沌さを強調すること、そしてもう一つ、それにもかかわらず、Scanlon が well-being の重要性を否定する方向を打ち出すのに対して本稿が well-being の重要性をむしろ積極的に認めることにある⁽⁹⁾。

まず、3-9-1 で Scanlon の well-being 論の中の、本稿の考察にとって重要性をもつ部分を概観し、3-9-2 で本稿の立場からの検討を行う。

3-8-1 Scanlon の well-being 論から

Well-being を構成するものと Scanlon が考えるものが通常の客観的リスト説が挙げるものにきわめて近いことは、1-2 で確認した。Scanlon 自身のまとめをやや長めになるが引用しておきたい。

“I conclude any plausible theory of well-being would have to recognize at least the following fixed points.. First, certain experiential states (such as various forms of satisfaction and enjoyment) contribute to well-being, but well-being is not determined solely by quality of experience. Second, well-being depends to a large extent on person's

degree of success in achieving his or her main ends in life, provided that these are worth pursuing. This component of well-being reflects the fact that the life of a rational creature is something that is to be *lived* in an active sense--- that is to say, shaped by his or her choice and reactions --- and that well-being is therefore in large part a matter of how well this is done --- of how well the ends are selected and how successfully they are pursued. Third, many goods that contribute to a person's well-being depends on the person's aims but go beyond the good of success in achieving those aims. These include such things as friendship, other valuable personal relations, and the achievement of various forms of excellence, such as in art or science.”

二番目に挙げられた、自身の生における重要目的の達成の成功は1 - 2で扱った紹介文献では一番初めに出されていたが、それは、これが彼の well-being 論の議論展開の軸になっているからである。

達成が、私の well-being にとって重要なものなのであっても、実際に行動において判断するさい我々が well-being のことを主に考えてそのために（達成を考えて）選択することはまづない。むしろ達成されるものがそれに値すると思うからするのである。達成自体が重要であっても、このような観点から達成は目指されるし、well-being の他の要因についても、well-being に貢献するからという理由で選ばれるよりも、それらのもの自体がそれに値するとか enjoyable であるという理由で選ばれる。友情が大切にされるのも、友情自体のゆえである。達成について言うと、我々は自分の目的を選択することはたしかだ。しかし我々が選ぶのはあくまでも worthwhile なものである。そして実際に我々はすべての worthwhile なものをするにはできないので、選択的にならざるを得ない。それは我々理性的存在の生にとって中核的なことである。 - - “one cannot respond to every value or pursue every end that is worthwhile, and a central part of life for rational creatures lies in selecting those things that it will pursue. It thus makes a difference whether an aim has been adapted” (Scanlon 1998 119) - - これが well-being の flexibility をもたらす事情である。こうした well-being の flexibilityこそが欲求充足説（ここでは informed-desire view）の主張を誘うものだが、しかしそれをもたらした事情はいま述べたことであり、重要なのは informed desire でなく rational aims である。こうした well-being に必要な要因、構成要素が先のような形で整理されるが、しかしこうした要件整理は well-being の theory と言えるようなものではないし、そのような theory の構築は不可能であろう。様々な要因のどれに重きを置くのがよいかは、どのようなゴールが人ごとにとられるかによる。そして well-being の境界はあいまいである。達成が重要でも達成を目論見られるところのものを選ばれる理由には

well-being とは関係のないことが様々に入ってくる。そして well-being を構成する enjoyment、達成の成功、友愛関係などが志向されるさいも、それらはそれ自体が価値があり、それ自体で重要なのである以上、well-being がそれ自体として一人称的観点において考察されることはほとんどない。そして達成は well-being にとって重要であるがそれはすぐ上で述べたように well-being の価値自体によっては基づけられないような様々な価値を持ち運んでしまうトロイの木馬のようなものである。(以上 Scanlon 1998 113-133)

付記 本稿は、連載のその一～その七の全体が 2015 年 9 月に完成され投稿されたものである。(投稿規約にもとづく。)

注

- (1) e.g. 村田 1994、小泉 1997
- (2) 実証的データが知られている。
- (3) 3 - 8 で Scanlon 1998 の well-being 論を検討するが、Scanlon は well-being を inclusive end としながら、こうした有機的化合成への踏み込みを欠いているように思われる。
- (4) Raibley 2013a は次のような指摘をしている。Identification というもの自体が pro-attitude である。そして楽しめるようなものの価値は、典型的には追及や参加の活動によって得られてくる。達成や実現を通じて、人は自身の活動を自身の価値に関わるものとして組織化する。
- (5) 上村 2003 など。
- (6) これはこれ以上は解明しようもなければする必要もない原初的事実であるとは考えない。
- (7) 年代が Frankfurt 2004 とずれていると思われるかもしれないが、Frankfurt 2004 はそれ以前のものを集大成したものである。
- (8) 正確に言うと（ここでは詳しく書くゆとりはないが）Frankfurt を批判しながらある種の bestowal があることを積極的に認める論はある (Badhwar 2003, Helm 2010) のだが不十分に思える。
- (9) 公平に言えば最後の対立点は、どのような点で重要かの観点がずれているので、十分にかみあった対立点にはなっていない。それでも本稿の立場からすれば本稿が重視するポイントへの着目を欠くこと自体が大きな不満点になる (3 - 8 - 2 後半)。

文献

その六で言及したもののみ。間接的言及等は除く。また翻訳を使用した場合も、著作年は原著の発行年を記し著者名も原語で記す (分かりやすさへの配慮のため)。

- ・ Badhwar, N. 2003, Love, in H. LaFollette (ed.), *Practical Ethics*, Oxford 42-69.
- ・ deSousa R. 2015 *Love* Oxford
- ・ Frankfurt H. 2004. *The Reason of Love*. Princeton.
- ・ Helm B. 2010. *Love, Friendship and the Self*. Oxford.
- ・ Jollimore T. 2011. *Love's Vision*. Princeton.
- ・ Keller S. 2013. *Partiality*. Princeton.

- ・ Kolodny, N., 2003, Love as Valuing a Relationship. *The Philosophical Review*, 112, 135–89.
- ・ 小泉賢吉郎. 1997. 『科学技術論講義』. 培風館.
- ・ 村田純一. 1994. 技術の哲学. (『岩波講座現代の思想 13 テクノロジーの思想』 3 - 44)
- ・ Nozick R. 1974 ノージック. 『アナキー・国家・ユートピア』. 嶋津訳. (原著は *Anarchy, State and Utopia* Blackwell)
- ・ Raibley J. 2013a. Health and Well-being. *Philosophical Studies*, 165, 469-89.
- ・ Scanlon T. 2014 *Being Realistic About Reasons* Oxford
- ・ Shusterman R. 1992. リチャード・シュスターマン. 『ポピュラー芸術の哲学』. 秋庭訳. (訳は 1999) 勁草. (原著 *Pragmatist Aesthetics*. Blackwell.)
- ・ 上村芳郎. 2003. 『クローン人間の倫理学』. みすず.